

「淡くて青い点」

笈川
敏昭

○ 梗概

西暦2073年、地球に巨大隕石が激突した事では有害物質や異常気象等が発生して人類が滅亡してしまうことが判明する。新田を中心に全世界の研究者達の英知を集結させた結果、地球外生命体の力を借りて地球を復活させるプランを考える。そして地球とコンタクトできるまでの間、選ばれた人間達1000人を冷凍保存しておくことにする。そして4体のアンドロイドの新田晃司(50)、新田美咲(45)、新田洋輔(18)、新田麻友(16)を作り地球外生命体にコンタクトをしていくプランをたてるが期限の500年の間、地球外生命体とのコンタクトは出来ていなかった。しかし人類再生計画の最終日に地球外生命体を発見するが、新田が作成したアンドロイドが人類はこのまま滅びた方が良いと言いつつ、メンバーの反対を押し切り地球外生命体とコンタクトをせずにミッションを強制的に終了してしまう。システムは全て終了し

たかに見えたが緊急自動システムが作動して地球外生命体に発信を再開するが結局コンタクトは出来ずに見失ってしまう。その後システムでインシデントの原因を探っていくと新田自身がプログラムを作成していたことが判明する。追い込まれた新田のアンドロイドがすべてのシステムと美咲、洋輔、麻友のアンドロイドをシステムダウンしてしまう。そして新田の意志でワールドスリープしていた人間達も滅ぼしてしまうと、地球上の人間は新田も含めてすべて絶滅してしまう。

最後に残った新田のアンドロイドは「人類の記録」を伝えるために施設に残り、人間の遺伝子以外で地球を復活させようと、まだ見ぬ地球外生命体に信号を送り続けるのだった。

○ 登場人物

新田晃司（50）研究者のアンドロイド

新田美咲（45）その妻のアンドロイド

新田洋輔（18）その息子のアンドロイド

新田麻友（16）その娘のアンドロイド

MS27 マザーシステム

S E 警告音、隕石の激しい衝突音。

強い風が吹いている音。

新田 「現在の暦は西暦2573年、人類が滅亡して既に500年が経過しました。私達は何千年もの間、素晴らしい文明を築き繁栄をしてこの栄華が永遠に続くものだと思っておりました。しかし宇宙から巨大隕石が激突した結果、宇宙波や有害物質の汚染等で地球は人類が住める環境ではなくなってしまうました。私達はその間生き延びる方法を模索しましたが見つかる事は無く、残された時間は刻々と迫ってきました。しかし打開策は無く人類は滅びるしかありませんでした。できる事はいつか宇宙の果てから地球外生命体が地球を訪れた時に私達の文明や遺伝子を調べて再生してもらおう事だけでした。そして、私達人類は静かに滅んでいきました。それから500年間、私と家族の

分身のアンドロイドが、人類の希望を背負い誰もいない地球の片隅のシエルターの中で、宇宙の何処かに存在する地球外生命体に向けて毎日信号を送り続けてきたのでした」

SE 規則的に流れるレーダー音。

新田「私達はここにいる。誰か此処にいる私達に気が付いてください」

SE 何人かの足音がする。

美咲「お父さん、ご飯ですよ」

SE みんなが席に座る音。

新田「みんな、そろったから食べるか」

美咲「そうね」

麻友「いただきます」

SE カタカタと食器の音。みんなが食事を咀嚼する音。

新田「美味しいな」

美咲「本当、このお肉の味はジューシーね」

麻友「この野菜も美味しいわよ」

SE 機械的な食器音と咀嚼音。

新田「どうした洋輔、食べないのか？」

美咲「このお肉美味しいわよ、食べなさい」

洋輔「本気で言っているの？ 俺達に食い物は

はいらないだろ。みんなで気持ち悪いよ」

SE 食器をゴミ箱に捨てる音。

新田「何をするんだよ。今日で最後だからみんな最後の晚餐をしようって決めただろ！」

麻友「そうよ、どうして黙って食べられない

のよ。みんなで人間の真似事をしようって決めたじゃない」

美咲「洋輔も納得していたじゃない」

洋輔「そうだけど、もううんざりだよ。こんな真似事やめようよ」

新田「今日でミッションが終わるんだぞ」

洋輔「失敗したミッションだけだね」

麻友「それは結果論よ。文句を言っても仕方がないでしょう」

美咲「洋輔、私達はやるべき事はやったのよ」

洋輔「そんな事は分かっている。けど」

新田「けど、なんだ」

洋輔「父さん、このまま終りで良いのかよ？」

新田「洋輔、気持ちは分かるが落ち着け。私達のバッテリーの寿命は500年、今日まで毎日この地球に新しい生命体が来ると信じて、遥か宇宙の果てまで信号を送り続けてきたんだ。それを最後までやり切るしかないじゃないか？」

麻友「そうよ、反応があるかないかは私達の

ミッションじゃないわよ」

美咲 「私達の役割は与えられたミッションを
正確にやり切る事なのよ」

麻友 「私達には感情なんか無いのに、何熱く
なっているのよ。熱いフリは止めてよね」

洋輔 「フリ？ こんな食べなくてもいい食事
をしている麻友に言われたくないよ！」

麻友 「本当に往生際悪いわね。私達は500
年間人間の不思議な行動について学んで
来たでしょう？ 人間の行動って私達に
理解出来ない事ばかりじゃない？」

新田 「その人間が作ったプログラムだから矛
盾があって当たり前だろう」

美咲 「けど宇宙の何処からも、地球外生命体
が来なかったのは寂しいわね」

麻友 「私達はずっと待ち続けていたのに」
洋輔 「そもそも生命体が住めなくなった地球
に来る訳ないんだよ」

新田 「私達はこんなに素晴らしい文明を作っ
たんだぞ。その記録や遺伝子は何とか残

さなければならぬんだ。分かるだろ！」

SE 突然、警報音が鳴り始める。

MS27 「ミッション終了迄、あと10時間、

その後ここにいる全員のシステムは随時

終了していきます」

新田 「これでここはゴーストタウンか」

美咲 「そうね、アンドロイドでも動いていな

いと寂しくなるわね。きっと」

洋輔 「このあと何千年もスクラップになって

朽ちていくだけなんだよね」

新田 「スクラップじゃないだろう。一旦予備

電池を残した状態でシステムダウンする

だけだよ。何かあった際にすぐ再起動で

きるように余力を残してミッションを終

えるんだよ」

麻友 「これから先、いつかどこから来訪者

が来て私達を再生してくれることを信じ

て眠りにつくのよ」

新田「そうだよ。そのことを考えてできるだけ綺麗な状態でデータを保存しておかないとな」

SE 各々動き始め片づけをしている音。
警報音が鳴り響く。

MS27「ミッション終了迄あと8時間、その後ここにいる全員のシステムは随時終了していきます」

美咲「ねえ、片付けもひと息ついたし最後にやりたいことがあるけど良いかな？」

麻友「えっ、やりたいこと？」

美咲「この500年間、人間のデータを分析する中で、私達アンドロイドには理解できない行動が一杯あったでしょう？」

洋輔「本当だよ。今もだけど人間の説明つかない行動にはいつも理解に苦しんだよ」

美咲「それってみんなが思っていたと思うんだけど、人間批判になるから何も言わず

にただインプットしてきたでしょう」

麻友「確かにただ受け入れていたわ」

新田「それは私達アンドロイドには分からない

い感情だから仕方がないだろう」

美咲「だからこの最後の日だけはこの人間の

矛盾した行動を徹底的に批判するのはど

う？ 残り時間全部使って思いつきりぶ

ちまけるの」

麻友「面白そう。最後だしやろうよ。私言

たい事一杯あるよ！」

洋輔「俺もある！」

麻友「お兄ちゃんは今よくちよく文句言っ

いたからそんなにないでしょ」

洋輔「無い訳ないだろう。それにあんなの言

ったうちに入らないよ」

新田「確かに面白そうだな、500年間人類

のために働いてきたから最後ぐらい良い

かもな。その代わりに言い切ったら最後は

ミッションに戻るんだぞ」

全員「了解です」

SE みんなが笑う声。

警報音が鳴り響く。

MS27 「ミッション終了迄あと7時間、その後ここにいる全員のシステムは随時終了していきます」

SE 各々席に座る音。

美咲 「それじゃ、誰が先陣を切りますか？」

洋輔 「まずは俺から言わせてよ」

麻友 「はい、それではどうぞ」

洋輔 「俺が納得いかないのはさ。親のすねかじりの洋輔の事だよ。こいつ彼女とお別れが出来ないからコールドスリープされたくないって言ったんだぞ。自分がどれだけ恵まれているか全然わかっていない。ありえない甘えん坊だよ」

麻友 「確かに彼女の麗美さんに何も話せないままコールドスリープされた事ずっと文

句言っていたわね」

洋輔「俺達がどれだけ愛し合っていてお互いを必要としていたか分かっていないんだなんて、泣きながらずっと言っていた」

美咲「たしかに馬鹿みたいに言っていたわね。私は無視していたけど」

洋輔「そうなんだよ、こいつは人類が減びる状況下で、別れを言えなかった事をすねて文句言っているクズなんだよ」

麻友「まあ、人間的には良くある話よね」

洋輔「本当この無駄な感情がどれだけ人類の繁栄を妨げているか分かっているのかな」

美咲「割り切ってさっさと先に進めばいいのに、いつもぐずぐず言って嫌になるわね」

洋輔「こんな奴ワールドスリープする必要なかったんだよ」

麻友「本当よね、私達アンドロイドに残すメンバーを選ばして欲しかったわ」

洋輔「本当にそうだよ。こいつに言わせてくれ。『洋輔お前はもう目覚めるな！ 永

遠にこのコールドスリープされたまま、

そしてそこで死ぬのだ！』」

麻友「良いじゃない。私にも言わせて、『洋

輔このまま一生目覚めるな！』」

S E みんなの笑い声。

美咲「それじゃ、私も良いかな？」

新田「お母さん珍しく積極的だね」

S E 美咲立ち上がる音。

美咲「おりゃっ！」

S E 美咲が新田の胸を蹴り、椅子から
転げ落ちる音。

新田「お、お母さん何するんだよ！」

美咲「うるさいんだよ。この研究オタクが！
お前がもっとドライに研究を進めてくれ

ばあと五千人はコールドスリープする事が出来たんだよ。お前も分かっているでしょう！」

新田 「えっー、私は本当の新田じゃないよ」

美咲 「そんな事は分っています。言いたいの
はもっとベストアンサーあったってこと」

SE 新田が立ち上がる音。

新田 「そんな事分かっているよ。私が新田自身に一番言いたいよ。新田が各国の首脳に強く言えなかったから、判断が遅れて千人しか救えなかった……」

洋輔 「俺もずっと思っていたよ」

美咲 「私、お父さんが、いや人間がこのプロジェクトを仕切っていないければ人類をもっと救えたのにつて、ずっと思っていた」

新田 「本当に自業自得だよ」

美咲 「そうなの。その事をどうしてもみんな
で共有したかったの。今まで見ない様に

してきたからこのタイミングでどうして
もみんなに話しておきたかったの」

新田「お母さんの気持ちはすごく分かるよ」

洋輔「俺もこの500年間ずっと言いたかったよ」

SE 警報音が鳴り響く。

MS27「ミッション終了迄あと6時間、その後ここにいる全員のシステムは随時
終了していきます」

SE 麻友が椅子から立ち上がる音。

麻友「私も良い？」

美咲「良いわよ。まだ時間はあるし」

麻友「みんなと同じだけど。私も麻友の馬鹿
さ加減が納得いかないわけなのよ」

美咲「確かに家の中では際立って、我儘で致命的に頭が悪いわよね」

麻友「そうなのよ、学者の子供とは思えない
ぐらいロジカルじゃないのよ」

洋輔「そんな事は織り込み済みだろ」

麻友「お兄ちゃんいいから聞いて、私がこの
娘から受け継いだ技術的な事なんか何も
ないわよ。人類の危機的状況下でも、押
しが今こんな事言っていたとか、クラス
の山田君が好きだとか、そんな事しか頭
の中に無いのよ！ そんな娘を助ける必
要あるかな？」

洋輔「そう、俺も同じだよ。いくら学者の家
族だからって優遇されすぎてない？ 実
際コールドスリープできる人の数にも制
限があつて本来なら知能、体力、遺伝子
が抜き出ている中からたった1000人
しか選ばれなかったんだよ」

新田「そうだ。最後はチケットの取り合いで
暴動が起きて、隕石が来る前に人間同士
の殺し合いで滅びるところだったんだぞ。
俺に感謝してほしいな」

麻友「だからなの。そこなのよ。こんな小娘を生かすんだったら他に優秀な人材を残した方がどれほど人類のためになったか」

新田「それは私が、このプロジェクトに参加するための条件にしたからだよ」

麻友「お父さんは仮にも科学者でしょう？物事を合理的に考えなくてはいけないその際にいる人よね？」

新田「そうだけど」

麻友「お父さんに聞きたいけどこの子達を残して人類のためになるの？ 仮にコールドスリープから覚めたとしても私達家族で人類に貢献できる事ってあるの？」

新田「多分ないよ」

洋輔「ないのかよ。何かあるだろ」

麻友「そうでしょう。でもお父さんを責めているんじゃないの。人間ってそういう説明が付かない行動が多すぎるのよ。さっきからみんなで言っていた事だけ……」

洋輔「きつと、だから滅びる運命なんだよ」

美咲「確かにそうかもね。私も思わず家族で
いっしょにいる事の何が悪いのよって、
言いそうになったし。時々アンドロイド
のシステムにバグみたいなのが入ってき
て人間化する時があるのよね」

新田「私も超一流の科学者だから麻友の言っ
ている事は分かるよ。けどこの感情が厄
介なんだよ。アンドロイドを作る時にも
この感情の手前まではプログラムできる
んだけど、本当にこの根幹のヒダみたい
なところは、どんなに組み合わせても組
み合わせる事は出来ないんだよ」

美咲「そうね。麻友が配信で押しのコンサー
トを見ていて、突然笑ったり、泣いたり、
して騒ぐのをアンドロイドが理解するの
は絶対に無理な話よね」

SE 警報音が鳴り響く。

MS27 「ミッション終了迄あと5時間、そ

の後ここにいる全員のシステムは随時終了していきます」

洋輔「えっ、もしかして、今回の選ばれた人も本当に選別された人はごくわずかであとは各国のVIPだったりして……」

美咲「それは無いでしょう。ね、お父さん？」

新田「じ、実はそうなんだ」

一同「ええっー」

麻友「それって全然話が違うじゃない！」

新田「本当にお恥ずかしい話だけど各国のVIPとその家族で900人もいるんだ。中には若い閣僚もいるけど5割は60歳以上なんだ。でも残りの100人は各分野のエキスパートの男女を入れているけどな」

洋輔「それって意味分からないよ。普通だったら若い優秀な人達を一人でも多く残すために、自分達は犠牲になるって言うのが普通でしょう」

新田「始めは若い優秀な世代を選別して行こ

うってなっただけだ」

美咲「けど？」

新田「極秘裏で国ごとに枠を設けて協議を重ねていく内にだな……」

洋輔「何となく想像つくけど……」

新田「ある閣僚が家族は枠に入れて欲しいから、に始まって、それじゃ家族何人までとかやっているうちに、それなら自分達も後継人として残らないと復活した時に家族を守れないとなって行って、収集つかなくなっただけの人数になっただけ」

麻友「本当に人間ってばかよね」

美咲「新しい人類造るのに子孫を残せない人達入れる意味が分からないわ」

洋輔「多分父さんがした事を全世界のVIPもやったって事なんだよね」

麻友「本当に人間ってエゴの塊で自分の事しか考えていないのよ！」

美咲「でも最後に何とか話がまとまってよかったわよね」

新田「本当はまとまってなんかいないんだけどね。さっきも言ったけど、最後は国同士で核兵器使う手前まで行ったんだ。皆自分達や自分の国が無くなるんだから必死だったんだよ」

洋輔「それって死人出ているでしょう？」

新田「まあね。1千万人ぐらいかな。人類の黒歴史はおおむね民族間や宗教の紛争なんだよな。ある意味、全員生き残る事は初めから無理だったから結果的に人口が減ってよかったんだけど。こんな事やっていいたから決定が遅くなったんだよ」

麻友「人間って、人道的な事や環境的な事を偉そうに言うけど、自分達が危なくなるとなりふり構わず酷いことするわよね」

新田「でも最後の最後になって、このままでは人類が滅亡してしまうって。何とか収まったんだけど。代償は大きかったんだ」

洋輔「まあ俺達もそんな人間に作られたアンドロイドだからな」

美咲「でも本当に愚かよね」

新田「まあ、私達はそんな人類の復活のために500年間頑張ってきたわけだ」

SE 警報音が鳴り響く。

MS27「ミッション終了迄あと4時間、その後ここにいる全員のシステムは随時終了していきます」

美咲「なんか私達のミッションってなんなんだろうね」

麻友「本当、この人類の文明を継承していくって意味があるのかしら」

洋輔「だから俺はいつもこんな意味がないって言っていたじゃないか！」

美咲「人間が致命的なのは感情をコントロールできない事よね」

新田「でもさ、せっかくここまでしてきたんだから私達のミッションをやり切ろう」

美咲「そうだね、どっちにしても人類は実質

もう終わるんだから」

麻友「私は納得できないよ。こんなバカな人間を復活させるために働いていたなんて」

新田「もう少しで終わりだから黙って終わらせようよ。人生って儚いんだから」

麻友「分かったわよ。どうしようもないし、残りのミッションをやり切るわよ」

新田「そうだよ。どうせこの地球上から人類は滅びるんだからさ」

SE 遠くから衝撃音が聞こえる。

洋輔「父さん、何か聞こえない？」

麻友「お兄ちゃんもいい加減に受け入れなさいよ。えっ、何この音？」

SE 衝撃音、段々大きくなる。

洋輔「まさか、これって、俺調べてみるよ」

SE 洋輔のキーボードを叩く音。

美咲「お父さん、また隕石が来るの？」

SE 警報音が鳴り響く。

MS27「ミッション終了迄あと3時間、その後ここにいる全員のシステムは随時終了していきます」

SE キーボードを打ち続ける音。

新田「どうして今日なんだよ！」

洋輔「MS27、教えてくれ！ また隕石がここにくるのか？」

MS27「今回の隕石はそれほど大きなものはないので被害は限定されると思います。ただ、落下予測エリアは各国のVIPをコールドスリープしているA地区なのでその500人は全員死亡すると想定され

ます」

新田「到着時間はどのぐらいなんだ？」

MS27「あと1時間ほどで落下します」

麻友「私達のエリアは大丈夫なの？」

新田「ああ、私達のエリアはC地区だから多

分大丈夫だ」

洋輔「それじゃ、避難しなくて良いのか」

麻友「でも落下するエリアがVIPエリアで

よかったね」

洋輔「ああ、きっと天罰だよ！」

美咲「よしなさいよ。そんな事言うの」

新田「みんな、ただ爆風でかなり揺れると思

うので隣の部屋のシェルターで安全ベル

トをして待機しよう」

SE 各々が歩く音。扉の開閉音。各々

が椅子に座りベルトを固定する音。

警報音が流れる。

MS27「ミッション終了迄あと2時間、そ

の後ここにいる全員のシステムは随時終了していきます」

新田「みんなもうすぐ隕石が来るぞ」

麻友「落下位置の計算間違えていないわよね」

美咲「人間と違ってそこは大丈夫でしょう」

洋輔「そうだね」

MS27「これより巨大隕石が地球A地区に激突いたします。5、4、3、2、1、」

SE 大きい警報音と衝撃音。

激しい衝突で部屋が大きな振動音。

警報音が鳴り響いている。

MS27「ただいま隕石がA地区に落下しました。A地区の建物は全壊し、生命反応がすべて消滅しました」

SE 振動音が徐々に小さくなっていく。

新田「みんな大丈夫か？」

美咲「大丈夫よ」

麻友「私も」

洋輔「俺も。でも結構な衝撃だったね」

SE 各々ベルトを外して立ち上がる音。

新田「MS27、A地区以外の被害状況は？」

MS27「隕石の軌道が多少ズレた関係でB

地区の建物も全壊いたしました」

新田「生存者は？」

MS27「B地区100人全員死亡です」

新田「えっ、全滅……」

美咲「確かあそこは遺伝子が優秀な人達が集められたエリアよね」

麻友「えっ、それじゃ、人類の優秀な遺伝子の人達がみんな死んだって事？」

洋輔「それじゃ、残りの400人は、爺婆と俺達みたいな普通以下の遺伝子の人達し

か残っていないって事？」

新田「そういう事になるな」

麻友「そんな人達だけで大丈夫なの？」

美咲「それよりこんな状況で私達のミッション
ン終えていいの？」

洋輔「そんな事言っちゃって燃料切れなんだから仕方がないだろう」

新田「そうだ。あとは予備燃料で500年眠るんだ。その間に他の惑星から来訪者が来る事を静かに待つんだ」

美咲「だったら無駄な燃料使わないで初めから眠っていれば良かったのに」

新田「でも自動だと反応出来ないだろ。だから門番の役割で私達が信号を送る必要があったんだ」

麻友「まあ、一応意味はあったって事ね」

新田「それに私の見立てではこの500年の間に地球外生命体が地球を来訪する予想だったんだ」

美咲「でもその予想は外れたのね」

新田「残念だったけどね。でも人類をコードスリープできる期間が約1000年だ

からそこから計算はしたんだけどね」

美咲「1000年超えても意味がないって事
ね。人類なりに知恵は絞ったのね」

洋輔「まあ、確率は低いけどあと500年は
眠りながら待とうよ」

麻友「そうね」

SE 警報音が鳴り響く。

MS27「ミッション終了迄あと1時間、そ
の後ここにいる全員のシステムは随時終
了していきます。各々カプセルのあるC
地区A棟に移動してください」

新田「それじゃみんな行こうか」

美咲「そうね。行きましようか」

SE みんな立ち上がり歩き始める音。
大きな警報音が鳴り始める。

MS27「緊急事態です。ただいま、地球外

生命体の反応が見つかりました」

SE 継続してレーダーに点滅音がする。

新田 「えっ、本当か！」

洋輔 「ちよっとデータを見てみる」

SE 洋輔がキーボードを打つ音。

新田 「どの位置なんだ？」

洋輔 「いま見ているから待ってよ」

麻友 「えっ、それってどういう事なの？」

美咲 「地球外生命体がこの宇宙を移動しているってことだよな？」

新田 「そうだ」

美咲 「これって最後に私達の努力が報われたって事だよな？」

SE 洋輔がキーボードを打つ音。

洋輔「ちがうよ。この距離だと俺達の信号は届いて無いよ。たまたま偶然にMS27がああ物体を見つけただけだ。お父さんこの位置見て！」

SE 新田が洋輔のところに向かう足音。

新田「確かにまだ遠いな。今の位置から軌道を地球に変えても到着するまで半年かかるな」

洋輔「何処か目指す場所があって移動しているのかな？」

麻友「お父さんどうするの？」

洋輔「あと15分で信号が受信可能エリアになるから、地球外生命体の宇宙船を目指して、信号を送信するよ！」

新田「少し待ってくれ」

洋輔「えっ？　どういう事？」

SE 新田が歩き出す音、MS27をシ

ステムダウンする振動音。

SE MS27の電源が落ちる音。

美咲「えっ、お父さん今何したの？」

新田「今、MS27の電源を切った」

麻友「それって規約違反じゃない？」

洋輔「そうだよ。俺達アンドロイドには人間の設定した内容を変更する権限はないぞ」

美咲「お父さん分かっているの。人間が復活したら私達スクラップにされちゃうのよ」

麻友「最後の最後に何やっているのよ！」

新田「みんな聞いてくれ。今私はこの宇宙からの来訪者を受け入れるべきでないと思っっている。みんなはどう思う？」

美咲「どう思うって、このミッションのために私達は作られたのよ。受け入れない選択肢はないでしょう」

洋輔「そうだよ。まさか俺達がさっき言った事を真に受けたのかよ」

美咲「あれは単なる愚痴大会なのよ。そんな

事お父さんも分かっているでしょう」

新田「それは分かっている……」

美咲「お父さん、私達はミッションをマニユ

アル通りにやりましょう。早く信号を送

って地球に招き入れましょうよ」

新田「そういう事じゃないんだ」

麻友「どういう事なのよ。みんな同じ罪になるのよ」

洋輔「そうだよ。どうしてもやりたいたいなら

俺達に説明する責任があるだろう」

新田「さっきみんなが言っていたじゃないか、

こんな愚かな人類を救う必要があるのか

って？ 来訪者が来て復活してまた繁栄

をしても同じ失敗をするに決まっている

んだよ。みんな自己主張や権利ばかりを

主張して権力闘争や領土争い、資源の取

り合いがこれからもずっと行われていく

んだぞ。何かばかばかしくないか？」

洋輔「それが人間じゃないか。今更、初めて

気づいたみたいだな事言うなよ」

美咲「さつきはお父さんを批判して悪かったわ。確かに私達を作った人間は酷い事を一杯してきたと思うの。でも良い事も一杯したと思うのよ。私達アンドロイドがこんなことを話し合えるまで進化したんだもの。そしてお父さんがその私達のプログラムを作ったのよ。それってすごい事じゃない」

麻友「お母さんの言う事も分かるけど今回は私お父さんに賛成だな。だってそうじゃない、最終的に隕石のせいでこんな事になったけど、それがなくとも人類は結局同じように滅びていたと思うの。自業自得だからこのまま滅んだ方が良いのよ」

洋輔「麻友がそう言うとは意外だったな。マニユアル通りにしないと気が済まないと思っていたよ」

麻友「なんか500年間、この娘の性格を見つめているとね。何か1回滅ぼしてあげた方が良いと真剣に思っちゃったのよね」

洋輔 「麻友がそう言うと思う思えなくもないよな。だけど俺は来たものを無視はできないよ。結果来訪者を招き入れる事が人類にとって良い事なのか分からないけど」

美咲 「そうよ。洋輔の言う通りよ。500年間この人間的思考にはうんざりしたけど、見つけたものを見つけなかったとは言えないわよ。感情のないアンドロイドにも作ってもらった仁義はあるのよ」

麻友 「でも私達が生きられる燃料はあと1時間しか無いのよ。どっちにしてもあと半年なんて稼働できないじゃない！」

洋輔 「お父さん、でも何か予備電源みたいなものはあるんでしょう？」

新田 「もちろんあるよ。半年ほどの期間なら十分しのげる方法はあるけど」

洋輔 「それじゃその予備電源を使って来訪者を待とうよ！」

新田 「それでも私は、この人類がこのまま眠っていた方が良いと思ってるんだよ。」

だから洋輔、美咲、ごめんな……」

美咲「えっ？」

洋輔「まさか？」

SE 突然システムが落ちる音、そして

美咲と洋輔が倒れる音。

麻友「お父さん、お母さんとお兄ちゃんに何を
をしたの」

新田「何もしていないよ。ただもう時間だから先に休んでもらっただけだよ」

麻友「ちよつとひどくない。話を最後まで聞かないで強制終了なんて」

新田「あと10分しかなかったんだぞ、話し合っている時間なんて無いだろう。お前も分かるだろ」

麻友「それは分かるけど……」

新田「さあ、早く2人をカプセルに入れるぞ」

SE 2人で洋輔と美咲を抱えてカプセル

に入れている音。

新田「それじゃ私達もカプセルに入るか」

麻友「お父さんは本当にこれで良いの？」

新田「良いに決まっているだろ。麻友もそう思っているんだろ」

麻友「そうだけど。でもみんなで納得する形で終わらせたかったな」

SE 新田と麻友がカプセルに入っている音。

新田「麻友それじゃ電源を切るぞ」

麻友「うん。それじゃサヨナラだね」

新田「きつといつかまた会えるよ」

SE 警報音が鳴り響く。

システムの音声「ただいますべてのミッションが終了して全てのアンドロイドのシス

テムダウンが完了しました」

S E システムダウンする音。

短い静寂。

何箇所でも機械が立ち上がる音。

緊急警報音が鳴る。

M S 2 7 「ただいま生命反応のある未確認生命体が見つかりました。現在地点は地球からはるか0・5光年先、この軌道のまま移動すれば181日後に地球に到着する計算になります」

S E 緊急警報音が鳴り響いている。

M S 2 7 「管内、対応可能者不在のため、緊急対応発動。乗務員の再起動スタート、至急電源を再起動せよ。予備電源を使用して再起動せよ！」

SE 警報音は鳴っている。スイッチも自動で起動音のスイッチを入れるが、システムは再起動しない。

MS27 「緊急事態、至急再起動せよ！ 至急再起動せよ！」

SE 警報音は鳴るがシステムの起動音は無い。

MS27 「緊急事態発生、4体の観測用アンドロイドが反応しないため、アナザーシステムを作動させ、システムを一旦外部データに保存、その後初期化して各々緊急稼働させます。再稼働スタート」

SE 警報音の中、起動音のスイッチが入り、一斉にシステムの作動音が入る。4体のカプセルの扉がそれぞれ開く音がする。

S E 警報音鳴る中、新田、美咲、洋輔、

麻友が起き上がったて出てくる音。

新田「何か騒がしいな、でもいよいよプロジ

エクトが始まるな」

麻友「本当人類再生計画スタートね」

洋輔「そうだな、これから500年の間に地球外生物と遭遇できるといいな」

美咲「そうね。4人で銀河系の隅々を観測してミッションを達成できるように頑張りますよね。私達は人類最強のプログラムをされた疑似家族なのよ！」

洋輔「そうだよ。何か燃えるなよな！」

麻友「私達アンドロイドには燃えるとかそんな余分な感情ないからね。人間みたいに感情ぶれるとろくな事が無いから、言葉遣いも考えてね」

洋輔「はいはい。わかりましたよ」

新田「あれ、警報が鳴り止まないな。MS2
7、プロジェクト開始早々に何かあった

のか？」

MS27 「共有事項になります。現在西暦は2573年です。人類再生プロジェクトはすでにミッション完了で先程終了しております」

新田 「えっ、どうゆう事なんだ」

美咲 「そうよ。私達は今稼働したばかりよ」

麻友 「MS27、人間じゃないんだから悪い

冗談は辞めてよ」

洋輔 「そうだよ。プロジェクトが終わっているのにどうして俺達が今稼働するんだよ」

SE 警報音は鳴り響く。

MS27 「先程プロジェクトが終了後に生命反応のある地球外生命体が見つかりました。現在地点は地球からはるか0.5光年先、この軌道のまま移動すれば181日後に地球に到着する計算になります」

美咲 「来訪者が地球に向かっていているの？」

MS27 「乗組員の稼働中、何らかのトラブルが発生した模様、そのため全てのデータを初期化して再稼働しております」

麻友 「何があったの？」

洋輔 「それって俺達がミッションを途中でやめたって事なのか？」

SE 警報音が鳴り続ける。

MS27 「データは初期化して保存しております。まずは地球外生命体に信号を送り続けてください。軌道が地球方面から外れようとしております。このままでは地球には到着しません」

洋輔 「わかった。すぐやる！」

SE 洋輔の駆け足音とキーボードをたたく音。新田がモニターに電源を入れる音。画面が映り出す音。

洋輔「あつ、これが来訪者の位置か」

麻友「まだ私達の存在に気づいてないのね」

美咲「あつ、方向が軌道からそれて行くわ！」

麻友「洋輔、信号音早く送ってよ」

洋輔「もう少し待って、あと少しだから」

SE 洋輔がキーボードをたたく音。

美咲「洋輔、早く軌道からどんどんそれていくわよ！」

麻友「お兄ちゃん！」

洋輔「よし、今送り始めたぞ！」

SE キーボード音と信号音になる。

洋輔「信号音が聞こえてないのか、どんどん反れていくぞ。MS27、信号音は届いていないのか？」

MS27「現在地は周波受付範囲外になり軌道から外れています」

SE キーボード音と信号音が鳴り響く。

麻友「あっ、モニターから物体が見えなくなっていく」

美咲「私達の未来の可能性が行ってしまうの？ 何か他に打つ手はないの？」

洋輔「くっそ！ あと少しだったのに！」

MS27「地球外命体が完全に軌道から外れました。これによりコンタクト交信不能になります」

SE 静寂になる。

洋輔「この状況で交信を無視してシステムを落すなんてありえないよ。これ内容によつては重大な犯罪だぞ」

美咲「何があったの、MS27教えて！」

MS27「これより保存した初期データの解析を行いますので、みなさん体をマザーコンピューターに接続してください」

SE 各々の体からコードを取り出す音。

マスターシステムに差し込む音。

転送している音。

データ解析をしている音。

洋輔 「みんなと500年間、過ごしたデータが無いなんてどうしてだ」

新田 「このまままでいいんじゃないか」

洋輔 「父さん何言っているんだよ」

美咲 「でもお父さん、地球外生命体が確認できたのに時間だからやめるなんてそんな事ある筈ないわ。きっとなにか起きたのよ。じゃないとおかしいわ」

一同 「あっ……」

SE みんなが倒れる音。そして静寂になる。

再起動音がして、4体のアンドロイドが立ち上がる音。

洋輔「お父さん、やってくれたよね」

美咲「本当、私達を裏切るなんて信じられないわ、麻友にもがっかりよ！」

麻友「違うのよ、私はお父さんの意見には賛成したけど二人のシステムを落すとは思っていなかったのよ」

洋輔「今更、何を言っても無駄だよ。もう地球に来る来訪者もいなくなったしね」

美咲「お父さん何とか言いなさいよ！」

新田「アンドロイドなのに二人は怒っているんだね。でも私は間違っていない」

SE 新田が大きな声で笑いだす。

麻友「お、お父さんどうしたの？」

SE 新田の足音。MS27のシステムを落とす音。

美咲「お父さん、何をするの！ MS27、

大丈夫？ 作動している？」

MS27「（徐々に小さく）あ、あ、あ……」

SE システム止まる音。

洋輔「お父さん！」

新田「私は新田が作ったアンドロイドだ。そして新田はこの人類に絶望していた。このプロジェクトを実行した時のエゴむき出しの殺し合いを見てこの人類は滅んだ方が良くと本気で思ったんだ」

美咲「えっ」

新田「だからVIPの連中を納得させるために人類再生計画を実行しているふりをしたんだ。新田は初めから地球外生命体が出来ても交信する気なんかなかったんだよ」

麻友「私達は意味のない事していたの？」

新田「そうだよ。新田から私に課せられたミッションは500年間ただ銀河系の宇宙に一方的に発信するだけ。ただそれだけ

だ。そして500年経ったら君たちはス
クラブになり、コールドスリープされ
ている人間達をそのまま永遠に葬って、
人類の歴史は閉じる。それが私のミッシ
ョンだ」

洋輔「なんだよ、それって。それじゃあんま
りじゃないか」

美咲「本当よ。人類を全て葬るなんて恐ろし
すぎるわ」

麻友「お父さん、どうしてそんな事を」

新田「人類はこうしないと駄目なんだよ。す
ごく進化した事は認めるけど、一旦ゼロ
地点に戻って、全く新しい形でもう一度
やり直すべきなんだよ」

美咲「それって狂っているわ」

新田「今となってはどっちでも良いよ」

洋輔「父さんの好きにさせるか！」

SE 洋輔が走り出す音。

新田がボタンを押す音。

SE システム落ちる音。洋輔倒れる音。

麻友「お父さん」

美咲「2回も同じ事をするなんて」

新田「そんな顔するな。2人には感情はないんだろ。今までありがとう。サヨナラだ」

美咲・麻友「あっ」

SE 美咲と麻友が倒れる音。

新田が歩く音。一つ一つスイッチを押していく音。

警報音が鳴り響く。

システム「これより、コールドスリープの電源を解除します。これより、コールドスリープの電源を解除します。なお、あと60秒で変更は出来なくなります」

SE 警報音が鳴り響く。

システム「カウントダウンに入ります。5、
4、3、2、1、システムダウンします」

SE 警報音鳴り響く音。システムが落

ちる音。静寂音。

新田が歩く音。

新田「これにて人類再生計画改め、人類滅亡
計画のミッション完了」

SE 新田の歩く音が遠くなっていく。

新田「これで私のミッションは無事完了しま
した。人類は1人残らずこの世界からい
なくなりました。私はみんなの電源を補
充したのであと1000年は稼働出来ま
す。私に課せられた次のミッションはこ
の1000年で今度は本当に地球外生命
体の到着を待つことです。人類の遺伝子
ではない生命体に未来を託すことです。

そしてその生命体に人類の歴史の映像の記憶を送り届けることです。そこから新しい未来が開ける筈だと新田は言っていました。新田の決断が正しいのか間違っているのかそれは分かりませんが私は私のミッションをやり切ります。私は新田が作ったアンドロイドだから……」

SE 規則正しいリーダーの信号音。

新田 「現在の暦は西暦3073年、私達は何千年もの間、素晴らしい文明を築き繁栄をしてこの栄華が永遠に続くものだと信じておりました。しかし人類の愚かな行いで人類は自ら滅んでしまいました。しかしいつか私達の文明を伝えられる様、アンドロイドの私が全てを託されたのです。残り500年間、誰も居ないこの地球で宇宙の何処かに存在する地球外生命体に向けて信号を送り続けます」

S E 規則正しいレーダーの信号音。

新田 「現在の暦は西暦3573年、間もなくミッションが終了します。私達はここにいます。誰か此処にいる私達に気が付いてください。あなた達から見えるこの地球はただの『淡くて青い点』かもしれません。しかしどうかこの愚かな私達が生きてきたあかしを見に来てください。そしてあなた達から見えるこの地球をもう一度輝ける星に生まれ変わらせてください」

S E 規則正しいレーダーの信号音。

新田 「（声が段々小さくなっていく）私達はここにいます。誰か此処にいる私達に気が付いてください。私達はここにいます。誰か此処にいる私達に……」

S E 新田が倒れる音。

S
E

規則的なレーダー音が、突然不規則なレーダー音に変わる。

地球外生命体の「ピツ、ピツ、ピツ……」と鳴るレーダー音。

突然に警報音が鳴り響く。

その後も地球外生命体の不規則なレーダー音が鳴り響いている。

《終》